

白河古事考

一

白河古事考

御禮

秋山文庫
3-135
6

白河古事考卷之二

関門起廢関附和

一東鑑阿部頼時南郡ヲカスメ鎮メ西ハ白河ノ関
ヲサカイ廿四日ノ行程夕リ東ハ外濱ニヨリテ
又十餘日ノ行程夕リ又同書中尊寺建立ノ事ヲ
記メ寺塔四十餘宇禪坊三百餘宇也清衡六郡ヲ
管領スルノ最初ニ是ヲ草創ス先ハ白河木關日
リ外濱ニ至ル迄廿余日ノ行程也其路一丁別ニ
笠率都婆ヲ立テ其面ニ金色ノ阿弥陀ノ像ヲ圖

市書印
名國之
立館

今白河郡旗宿^木ノ土民一是等ハ正^木書ニテ
下佛ト唱ル碑ニ基アリ
白河関見ヘタル始メニシテ土人ノ傳ル白河古
傳記ト云書ニハ友原清衡カ子基衡鎮守府將軍
トメ其比亂國ユヘ奥州ノ入口白河ヘ関ヲスヘ
野州ヲ押ヘ又棚倉大ヌカリヘ関ヲスヘ常陸下
総ヲ押ヘ兩所ニ明神ヲ祭り関ノ明神ト崇メ奉
ル是ヲ白河ニ买ノ関ト云フトナリ年曆ヲ以テ
考ルニ関ノ始ハ基衡ヨリ早カルヘシ平兼盛ノ
歌ニモ見ヘタリ関ノ設ハ吉鎮守府將軍タル人
奥州一國境界固メノ為ニ置タルナラン

按旧事紀ニ志賀高穴穗朝五十有三年秋八月
丁卯朔天皇欲巡狩日本武尊^天平諸國冬十月
從海路已而幸常陸尚到白河関トアリ此時已
ニ関ノ稱アレト

孝徳帝ノ朝三関ヲ置レシハ関ノ始メト云ナリ
且舊事紀ハ偽作ノ説アレハ固ヨリ疑ヘシ
然シナカラ諸國ノ関ニ比スレハ設モ堅固ニメ
名モ秀テ、ソ有ケン唐土ニテモ聞ヘシトテ明
ノ太祖僧無一ヲ我國ヘ遣ハサル、時ニ僧一初
カ送別ノ詩^{全詩甚夕長}通鑑^{見ヘタリ}本朝ニ白河関高玉繩

下ノ句アリ又京都知積院泊翁和尚ハ博學人
ナリシカ其文中谷響集唐土鬼門関ノ事ヲ引テ
曰日本風騷士以奥州白川関在東北隅称鬼門関
蓋取名於交趾矣トアリ又此関ヲ二所ノ関ト云
フハ回國雜記ニ白川二所ノ関ニ至ルトアレハ
足利ノ頃唱ヘシ名ニヤ然シ其頃ハモハヤ関ハ
廢シタラニ二所トハ古傳記ニ言如ク旗宿ト大
洪ナリト云ニハ非ス旗宿村ノ首尾ニ関門ニケ所
ニ設ケ行旅ノ人ヲ改メ非常ヲ戒メ一重ノ関ニ
ハアラテ二重ニ嚴重ニアリシ故ニ二所ノ関ト

ハ言シナルヘシ大洪ノ方ニモ僅カ六七丁ヲ隔
テ、上ノ関下ノ関ト唱フル地アル也是亦旗宿
ト同シスカタニ二所ニ関門作りタルナルヘシ
今ノ官道白坂ノ土人ハ旗宿ノ古道ト白坂ノ官
道トノ二所ノ関ナリト云氏今ノ官道ハ関アリ
シト天聞ヘス遺址ト覺シキ地モアラズ恐ラク
ハ非ナルヘシガレ氏昔ノ白坂ハ今ノ驛ヨリハ
半道許モ西ノ方ニ當リテ在リシトテ其アタリ
ヲ古ノ宿場ト云フ其界ヲ越レハ下野ノ木戸村
戦村ト云アリ是ハ那須家白河ト戦争ノ時ヨリ

名付ナルヘシ此道筋ニモ遺址ト覺シキ地モナ
ケレハニ匹ノ関ハ一ヶ取ニ重ニ作りタルニ
一定シタリト云ヘシ殊ニ関跡ノマキルヘキ無
キハ旗宿ノ関跡ニ如クハナシ土地ノ形勢モ此
所ヲク、リナハ行旅モ俄ニ外ヘ道ヲ避クヘキ
岐路モナシ其地ノ見付ニ関山横ハリ蝙蝠ノ翼
ヲ打伸タル如ク蟠リ又義経朝臣ノ旗立櫻家隆
卿ノ二位殿杉義家朝臣ノ母衣掛楓等古木生茂
リ白河ノ流モ此地ヨリ出テ東流ス因テ
老公定信諸臣ニ命ノ考索ノ此地ノ関址タルヲ

ヲ標ノ碑ヲ立テ碑表ニハ古関蹟ノ三字ヲ大書
シ裏ニハ左ノ文ヲ勒メ表出シ玉ヘリ

白河関址埋没不知其處所久矣旗宿村
西有叢祠地隆然而高所謂白河達其下
而流焉考之圖史詠歌又徵地形老農之
言此其為遺址較然不疑也廼建碑以標

焉爾

寛政十二年八月一日

白河城主從四位下左近衛權少將兼越中守源朝臣定信識
関ノ廢也ニ年ノ遠近不ツト云フヲ詳ナク子氏

和歌ニヨツテ考レハ拾遺集ニ平兼盛ノ歌ニ
子ノク白河ノ関ニ侍ルニヨメリケル

便アテハイカテ都へ昔ヤラシケク白河ノ関ハ越ヌト
又能因法師カ都ヲハ霞ト共ニ出シカト秋風ソ
吹白河ノ関ノ歌ハ京都ニテ讀シナレト此歌ヨ
ミタルニ此地過サルハ無念ナリトテ後奥へ下
リタリトモ見ヘタリ中古歌仙三十六人傳ト云
書ニ竹田大夫國行者下向陸奥之時白河関殊刷
之間人奇問其故答曰古曾部入道能因法師号秋
風ソ吹白河ノ関ト讀レシ云ナリ争カケナリニ

テハ過裁トイヒケリト見エサレハ能因モ實ニ
此地へ下リ國行モ関路ヲ過タルナルヘシ此時
ハ関ノ存セシ時見ニ過テ奥へ下リタルナリニ
其後鎮國ノ任廢ノ後ハ此関門モ設ケ不成ニナ
ルヘシ文治五年頼朝御奥州征伐アルニ泰衡兵
ヲ此地ニテ進ノ防戦ノ事ヲ聞ス仙道七郡會津
四郡岩城四郡等ヲ戦ハサレ前ニ捨テ、自ラ屈
メ伊達ノ大木戸ヲ限リテ打出サレハ泰衡兵謀
ニ拙キ故ニヤ泰衡亡テ後ニ白河郡ヲ始仙道會
津岩城ヲモ勲功ノ賞ニ諸將ニ賜ハリタレハ泰

衛ノ管内タリシトハ知ルヘシ白河ニ其時マテ
モ関タニ堅固ニ有テハ山河ノ險ハ固ヨリアリ
必此地ニ一戦アラシニ左ナキハ関ハ早廢シタ
ルナルヘシ梶原源光カ頼朝卿ニ扈從ノ関明神
ニテ今已ニ秋ノ始ナリ能因法師カ古ヲ思ヒ出
テサルカト問ヒ玉ヘハ景季馬ヲヒカヘテ
秋風ニ草木ノ露ヲハラワセテ君ガ越レハ関守モナシ
ト詠出ヲ見レハ関ノ有無ハ計ラレ子氏寐寔タ
ル様思ヒヤラレテ明神ノ社ノミ残りタルラン
カト覺ユル計ナリ西行法師ミチノ夕ヘ修行ノ

マカリケルニ白河ノ関ニ留リテ処カラニヤ常
ヨリモ月ノ面白クアワレニテ能因カ秋風ヲ吹
ト申ケニオカイツナリケント思ヒ出テ名殘オ
ホケレハ関屋ノ柱ニ書付侍リケルニ

白川ノ関屋ヲ月ノモルカラニ人ノ心ハトマルナリケリ
又建治三年ノ秋一遍上人與白河ノ関ヲ通りシ
ニ西行法師カ歌ヲ思出テ関屋ノ柱ニカヒ付ケ

行ク人ヲ弥陀ノ千カヒニモラサント猶ヨソトムレ白河ノ関
ト讀ル類々未タ関屋ハ荒ナカラモ残りニト覺

ユレトモ古ハ風流ナリト云氏関門ノ吏嚴然
トソ存シ誰呵ヲナサハカ、ル物アハレナル道
心者ノ筆トリテ関門ハ文字ナトカキ記セルヲ
イカテ尤メテ有ルヘキ然ラハ関ノ設ケハ廢シ
テ家屋毀ルニ任セテ有ケン文治五年結城
氏此郡ヲ賜ハリテ後千城築テ城ヲ以テ奥州ノ
咽喉ヲ控制スレハ區々タル関門ヲ以テ國ノ鎖
鑰トハ成サルヘシ其時ヲ廢シタルヘシ

一東鑑正治二年ニ工藤小次郎行光カ郎從藤五藤
三郎兄弟奥州ノ兵領ヨリ

按工藤左衛門尉ハ泰
衡追討ノ功ニヨリ其

子孫天正ノ頃ニテ安積郡ヲ賜ハ鎌倉ヘ参向ス
リ相續セシト仙道表鑑ニ見ユルノ處ニ白河ノ関ノ邊ニテ御使芝田ヲ按芝田
郡ヲ領セシ追討セラルヘキノ由ヲ聞其兵ヨリ駟方ヘ
リ合戦ノ日彼館ノ後ヨリ箭ヲ射ルテ其数ヲ知
ラス又曆仁二年正月十一日今日陸奥ノ國ノ郡
郷兵當ノ事沙汰アリコレ準布ノ例沙汰人百姓
等ワタリシニ本進ノソナヘテ忘レ錢貸ヲコノ
ミ兵濟ノ貢年ヲ追テ不法ノヨシ其キコヘアル
ニヨツテ白河ノ関ヨリ東ノ下向ノ輩ノ取持ニ
オ井テハ禁制ニ及ハス又絹布麁布八十ハ夕イ

ワレナシ本ノ様辨濟セシムヘキノ旨定メテ
匠作ノ奉書ヲモツテ前ノ武州ヘフレ被仰付ト
見ヘタル類ハ関門廢メ後ナルヘケレト白河ヲ
ハ関ヲ稱ノ喚フ人ノ口吻ニ熟シタルハ動スレ
ハ白河ノ関ト云タルヲ丹子ヘモ記シタルナル
ヘシ太平記ニ白河関ト云シモ其類トナルヘシ
一古今ノ人ノ歌ヨミテ白河ノ関ナト、云ヌルハ
強クニ此地ノ事實ニモ預ラテ詞ノシナニ云ヒ
出ヌルモ有レ氏自ラ土地ノ光ニモナリ好古ノ
心洩スヘキニモ有子ハ左ニ記ス

前大納言公任卿集ニミチサタガ陸奥ニ下ルニ
女ノシキフカヤリケル歌ヲキ、給テ

今更ニ霞ヘタルシラ河ノ関ヲハシメテ尋ヌヘシヤハ
橘為仲朝臣集ニ十一月七日白河ノ関ヲ過侍リ
シニ雪フリ侍シカハ

人ツテニ聞渡リシラ年フリテケフ雪スヘヌ白河ノ関
同集ニ白河ノ関ヲイツルアイダモミチイトオ
モシロシ

紅葉々ノカル、オリニヤ白河ノ関ノ名ヲソカス力カシ
新和歌集ニ権中納言少將ニテ宇都宮ヘクタリ

侍リケルツ井ニ白川ノ関ニ侍リテ

白河ノ関ノアルニノ宮ハシラタカ世ニ立ニチカヒ成ラシ

後拾遺集 民部卿長家 中納言定頼

東路ノ人ニトハヤ白川ノ関ニモカリヤ花ノ匂フト

カワツメノ別トオモヘト白川ノ関トノメハ泪ナリケリ

内裡名取百首 建保三年十月廿四日 作者

女房 順徳院 僧正行意 参議定家卿

従三位家衡卿 俊成卿女 近衛内侍

宮内卿家隆朝臣 左近衛中将忠定期臣

前丹波守知家朝臣 前丹後守範宗朝臣

散位行能

藏人左衛門少尉兼原康元

便アラハ都ヘツケヨ雁金モケフソコヘツルシラ川ノ関

東路ヤマタ白河ノ関ナレトカソヘシマノ秋風ノコロ

白河ノ関ノ関守イサムトモシクル、秋ノ色ハトニウス

道ノオクシラヌ山路ヲカサ子キテ夕霧深シ白河ノ関

何トナク哀レソ深キ行方モ夕白河ノ関ノユフキリ

アハレサハイツクラハテト白河ノ関吹ユル秋ノユフカセ

白川ノセキノ紅葉ノカラ綿月ニフキニク夜半ノ木枯

深アヘヌ木ノ葉ヤオソル秋ノ霜ケサ白川ノ関ノ嵐ニ

行マニ秋ノオクニテ白川ノ関ノアキタニシク降ナリ

白川ノ関トハ月ノ名ナリケリアクトモ秋ノカケヲ留メ
秋霧ノ朝夕ツ山路ハルカニモ来ニケリ旅ノ白川ノ関
ユク末モ夕霧ヲカキ夜ヲコメテタル白川ノ関路越エテ
詠千首和歌

関路秋風

藤原師兼

越ヘヌヨリ思フモ悲シ白河ノ関ノアサノ秋ノ初カセ
新和歌集

題シラス

有尊法師

白河ノセキモル神モ心アラハ我思フコトノ末トラガナシ
丹後守為忠朝臣家百首

関路歸雁

少納言藤原忠成

キク人ソ立トナリケル白川ノ関路モシラスカヘル雁金
木工權頭為忠朝臣家百首 備後守為経

白川ノ関ヲハ春ハモラシカシ花ニトナラヌ人ニナケルハ

俊成卿文治六年五社百首

月ヲ見テ千里ノ外ヲ思フニモ心ソカヨフシラカハノ関
寂昧四天王院障子和歌 建永二年

御製

大僧正慈圓

大納言通光

俊成卿女

有家朝臣

定家朝臣

家隆朝臣

雅経

具親

秀能

雪ニシク袖ヨ憂路ヨ夕ヘヌヘシニ夕白川ノ関ノアラシニ
初雪ニ冬草ワクル朝ホラケオクソユカシキ白川ノ関
白川ノ関ノ秋ヲハキ、シカト初雪ワクル山ノヘノミチ
ソコトナク山路モ雪ニ埋レテ猶夕ノミユシシラカハノ関
五月雨ノフル里トラク日數ヘテケサ雪深シ白河ノ関
クルトアクト人ヲ心ニヲクテサテ雪ニモナリヌ白河ノ関
ケヌカウヘニフリシケミユキ白川ノ関ノユナタニ春モユソタ
ヲモヒオクル人ハアリトモ東路ヤ雪フリヌトハ白河ノ関
都ヨリ初雪寒シ東路ヤミチノオクナル白川ノ関
陸奥ノマ夕白河ノ関ミレハ駒ヲソクノム雪ノフルミチ

歌合 建保五年十一月四日 實氏卿

残りケル月ノヒカリノオクモミツ雪ニヤトカル白川ノセキ
同書ニ 高倉

降ツモル雪ヲサナカラ照ス月ヨヨヒナリケリ白川ノ関
豊原統秋自歌合ニ 明應比

月影モイク有明ニソクリキテケフ白川ノ関ノアキ風
新後撰集 藤原頼範女

ミチノ國ヘマカリテ詠侍ル
音ニユソ吹トモ聞シ秋風ノ袖ニナレヌルニテカハノ関

隣女和歌集ニ

聞戀

白河ノセキノアナタニアリトキク壺ノイニ文イカテ踏ミシ
道助法親王家五十首和歌ニ

関花

西園寺入道大政大臣

山櫻花ノ戸サシヲ明ソメテ風モトマラヌ白川ノセキ
色ミエヌ花ノカノミヤカヨフラニ雲ニトキタル白河ノ関
白川ノセキノシカラミカケトメテ花ヲサソヒテ春ソクレ行
ケラヌニハミステ、過ル人モアラシ花ニカセヨ白川ノ関
玉葉集 法師任喬

越未テモ猶未トヲシ東路ノ奥トハイワシ白川ノ関

李花集 宗良親王ノ御集

中院准后歌見セ侍シニイツ方モ道アル
御代ニケカケレハ又モコヘナク白川ノ
関トアリシワハニ

道アレハ又モ越オント誰モミサケニ白川ノ関路マサシキ
金槐集 源実朝公ノ集

東路ノ道ノオクナル白川ノセキアヘヌ袖ヲモル涙カナ
大藏卿行宗卿集ニ

関路深雪

雪ツモル庭ニソシリヌイト、シク猶ヤソフラニ白川ノ関

源賴政集

於法住寺殿三熊野詣候間人々歌合せラ

レシニ関路落葉ヲ

都ニハニ夕青葉ニテミニカトモ紅葉キリニク白河ノ関

藤原ノ光経ノ集ニ

旅人ノニ夕跡付ヲ雪ノウヘニ月ノ光モシラカハノセキ

祐子内親王紀伊ノ集ニ

越ヲヨリオモヒコソヤレ陸奥ノ名ニ流レタル白川ノ関

源孝範ノ集ニ

白川ヤ櫻ニ春ノセキナラニコレヨリ花ノオクハ有トモ

面カケハ身ヲモハナレスナレクテ別レシカタハシラカハノ関

源直朝ノ集ニ 文明比ノ人

アハレニモ行年波ハ白川ノ関トメカタキ旅ノソラカナ

山廣日記ニ

フニハミツ又モソ思フ秋ノ風キカハヤユキテ白川ノ関

雲葉和歌集ニ

法性寺釣殿ニテ歌合侍ケルニ関路落葉

ヲ 俊成卿

色々ノ木葉ニ路モ埋モレテ名ヲサヘタトル白川ノ関

實方ノ集ニ

白川殿ニテ道ツ十少将セキトフニタル
ニヨリテ

イカテカハ人ニカヨハニカクハカリ水モモラサヌ白河ノ関
重之ノ集ニ

ハコカタノイツニテ京ニノホル

白河ノ関ヨリウチハトケクテ今ハコカタノイツカル哉

藤原雅経冬日詠百首

神鏡通

思ヒ立ホトコソナケレ東路ヤニ夕白川ノ関ノアナタニ

高大夫實無ノ詠百寮和歌

按察使

奥深キ人ノ心ハ白川ノ関ニナケレハ終モシラレシ

續詞花集ニ

藤原季通朝臣

見テ過ル人シナケレハ卯花ノサケル垣根ヤ白川ノ関

千載集

左大弁親家

僧都印性

紅葉ハソミナクレナ井ニ散シケハ名ノミナリケリ白川ノ関

東路モトシモ末ニヤナリスラニ雪フリニケリ白川ノ関

續古今集

寂蓮法師

藤原季茂

従三位行能

逢坂ヲコヘタニ果ヌ秋風ニ末ニソオモヘシラカハノセキ

都出テ日教ハ冬ヨナリニケリシクレテ寒キ白川ノ関

オナシクハ越テハ見ニシ白川ノ関ノアサタノ塩釜ノ浦
續拾遺集 津守國夏 觀意法師

白川ノ関ニテ行ヌ東路モ日カスヘタレハ秋風ソフク
夕暮ハ衣手サムキ秋風ニ獨リヤコヘニシラ川ノ関
續千載集 源邦長

秋風ニオモフ方ヨリ吹初テ都戀シキニラカハノ関
續後拾遺集 大江貞重 津守國助 源兼氏

別レツル都ノ秋ノ日数サヘツモレハ雪ノ白川ノセキ
都出テ日数オモハ道遠ニ哀ヘミケルニラカハノ関
限アラハケフ白川ノセキ越テ行ハハ越ル日数ヲソシル

新千載集

澄空上人

光臺ハ見ニハ見ニカハミサリニニ聞コソ見ツル白川ノ関
新拾遺集 丹波守忠守

今宵コソ月ニ越ヌル秋風ノ音ノミ聞シニラカハノセキ
新後拾遺集 左大臣

都ヲハ花ヲ見捨テ出シカト月ニソ越ル白川ノセキ
拾遺集

源満元

ヘタテ行人ノ心ノ奥ニコソニ夕白川ノセキハ在ケリ
新拾遺集

西行

都イテ、相坂コヘシオリトテハ心カスメシ白川ノセキ

後九條前内大臣

秋風ニケフ白川ノ関コヘテオモフモ遠シフルサトノ山

大藏卿高博

カヘルサハ年サクレテ東路ヤカスミテコヘシ白川ノ関

新續古今

平光隆

逢人モミタミラカハノ関コヘテ秋風吹トタレニ告ニシ

夫木集

家隆卿

雪ノ色ハ一タミラ川ノ関ノ戸ニ明ホノシルキ鶯ノコヘ

同治兼二年右大臣百首

霞

俊成卿

逢坂ニケサハキニケリ春霞夜半ニヤ立ニ白川ノ関

同南北百首

慈鎮和尚

音羽山ケサノ霞ノカキワケテ心ニカヨフシラカハノ関

同嘉應元年歌合

皇太后宮大夫俊成

白川ノ関トチリシク花ミレハ苔ノムシロハツモシニケリ

同歌林歌合

関路落花

前大僧正覺惠

影ヲタニ留メテ花ハ散ニケリカヒコソナケレ白川ノ関

同建仁二年五十首

関路花

俊成卿女

スクル春月日ハ花モシラセケリ秋風吹キシ白川ノセキ
同土御門内大臣家歌合 前中納言定家卿

夕ツシ夜入ヌル影モトナリケリ卯花サケル白川ノ関
同寂暁四天王院名実御障子ニ

俊成卿女

ソコトナク山路ハ雪ノ埋ムテ名ヲタノミ來ニ白川ノ関
同集同題 後久家大政大臣

白川ノ関ノ秋ハ關シカト初雪ワシル山ノ邊ノミチ

同名所歌合

白河関

藤原忠隆

浪カ、ル末ノ松山ミユル哉雪フリソムルシラカハノセキ
家集ニ

関路雪白川雪

或部卿為家

ミトリナル松ノ木末ニ雪トキテオハ色ウキ白川ノ関

藻塩草

時節頼方角部サヒツシ 兼輔

陸奥ノ白川コシテワカレニシヒツシサル行トハルケシ

堀河百首

中納言師時

白川ノ関ニヤ秋ハトニルラン照月カケノスミワタル哉
秋風抄 慈鎮

月ヲオモフエソカフ寫ニ秋カケテカツクヨヒ白川ノ関
カセオチシ秋ヨリ冬ニ年越テケフハ花ミルニラカハノ関
詠藻 俊成

雪ノ浪岩コス瀧トミユルカ十名ニ染レタル白カハノセキ
夫木集 西行法師

オモハスハシノブノ奥へ来ニシヤハ越カタカリニ白川ノ関
同 後鳥羽院御製

ユキニシク袖ニ夢路モ絶ヌヘシニ夕白川ノセキノアラシニ

宗長紀行

都ニ今ヤフクラン秋風ノ身ニシミワタル白川ノセキ

織田信長公 白川藩久徳典惣
丸衛門可藏短冊

ミヤコヲハナラハルト旅立テケフカリ子スル白河ノ関

寛永十三年伊達政宗朝臣遺骸江戸ヨリ仙臺へ
下ナル、時從ヒ還リ殉死セシ三人ノ歌ニ

青木仲五郎

ツイニ行浮世ノ中ノ旅ノ道下メヌモノカハ白川ノ関

加藤十三郎

白川ノ旅ノカキリト成ヌハ関ノ戸サシモ明テコソ行

茂庭采女

白川ノ旅ハ今ハ夕限リニテ関ノ戸サシモ明テ行カハ
仙臺中將及原吉村朝臣江戸へ往還シ玉ヲ折々
白河ノ関ニテ讀シ歌世一首ヲ卷トノ境ノ明神
へ奉納ナシ玉ヒシ歌数首ヲ奉ク

宝永元年家相續ノ後五月ハシメテ國ニ
下ルトテ同シク十六日白河ノ関ノ明神
ニマウテ、

関路モル世ノカクノトテ昔ヨリコ、ニヤ神ノ跡ヲタレケン
正徳元年四月朔日白河ノ関ヲ過ルトテ

今モ世ニ名ノミタ、セテ白河ノ関ノ戸サシハ守人モナシ
一白河関連歌百韻宗祇ト表題セル冊子ニ

アレコソ関ノ梢ニテ侍レトシルヘノ者教ヘ侍
ルニ心空ニテ駒ノ足ヲハヤメイソクニ関ニ至
リテハ中々コトノハニ宣カタシタ、ニ所明神
ノ上久タルニ一方ハイカニモキラヒヤカニ社
頭神殿モカウクシク侍ルニ今一方ハ坐フリハ
テ、谷ヲ軒端トノ紅葉ヲ井垣トノ正木ノカツ
ラエフカケ和タヌニ木枯ノミソク手向ヲハシ侍
ルトミヘテ感涙ト、メ難キニ無盛能因コ、ニ

ノソミテイカハカリノ哀侍リケント想像ニ瓦
礫ヲ作り侍ランモ中々ナレトミナ思ヒアツリ
テ

都出ニカスミモ風モケフミレハアトナキ空ノ夢ニ時雨テ
行末ノ名ヲハタノマス心ヲヤセタニト、ムム白川ノセキ
平尹盛是モ都ノ朋友ニテマ、ニ伴ニモ一入ア
ワレフカキニヤ

思フトモ君ニコヘスハ白河ノ関フク風ヤヨソニキカニシ 尹盛
尋ユニ昔ノ人ノ心ヲモ今白川ノセキノアキカセ 穆翁
木枯シモ都ノ人ノツトニトヤモミナシノコス白川ノ関 牧林

應仁二年十月二十二日於白河関

袖ニミナ時雨ヲセキノ山路哉 宗祇

木ノ葉ヲ床ノトモノユフ暮 尹盛

サヤカナル月ヲ嵐ノ宿ニミテ 牧林

夜寒ノソラハ寐ムカクモナシ 穆翁

オリモ井ス空ニヤ雁ノワクルラン 旬阿

白波アラキ沖ノハルケサ 祇

シハシタニカヨフモ舟ハ安カラテ 盛

一ムラ雨ニ人ソヤス 林

柴運フ尾上ノミナノ松カモト 翁

カケハシ遠クムカフヤニサト
行袖ノアクルトホソニ又ミヘテ
キヘテハ悲シ夜半ノオモカケ
老カ身ヤ此世ノ月ヲ送ルラシ
ツクル、我ハアヤモハツカシ
枯野ニハユフヘノ露ヲ餘波ニテ
アルカナキカノ花ノ 冬クサ
古御ヤトワレシ道モ夕ヘヌラシ
今ハ夕ヨリモ聞ヌヨヒシサ
唐土ハ夕、ウキ中ノエ、ロニテ
祇 林 翁 祇 林 盛 祇 翁

ユノニ行トモイトハレヤセシ
身ヲカクス人モヤトリハキカホシ
夕ツヌル山ハ雲ヲカキカケ
水氷ル雪ノムラ鳥餌ニ飢テ
冬ノ田ツラノ暮ノアハレサ
送り得ヲ今年ヲイカ、賤ノ庵
クムリヲタヤス袖ノ秋風
思ヒナキ月ニ泪モハラハレテ
ニ夕身ヲシレル雨ノ夜長サ
問来ヌモコトハリナレヤ我ヨハヒ
盛 祇 翁 祇 林 盛 祇 翁

イノキツレナクミヘヌサヘウシ
跡夕ヘテ戀路ニ入ラン山モカナ
行衛オホヘヌ雪ノ夕風
ハテシナキ心ハ花ニサソワレテ
夢ヲカキリノ世間ノハル
身ハフリヌハヤ永日モヨシアラシ
ナケキナツメリ入相ノカ子
物オモフ袖ニ涙ノ盡モセテ
人ヨワスレハウキモノコラス
心アル里ノトハヤ旅ノ暮
祇林阿翁祇林盛翁祇林

夕ノミテトニル山ツ淋シキ
鳥ナク峯ノ枯木ニ霜フリテ
雲モサハラヌ冬ノ夜ノ月
河音ノ高キヤ空ニ流ルラン
落シル水ソ風ヲツレタル
萩ノ葉ニ軒ノ篋ノ埋レテ
野寺ニフカキ庭ノアサ霧
道モナキ霜ニヤ秋モ帰ルラン
ミレニモ人ノシヘヌヤ一カケ
カル身ハ捨ルトイフモオロカニテ
祇翁盛祇翁林祇盛翁祇林

ナラワヒツ、ニ交^{カノミ}モテフル 祇
袖サムキアシタノ雪ノ市カリヤ 盛
川カセハラフ三輪ノ杉ムラ 林
キヨク行水モ御杖ノシルシニテ 翁
神ヨエ、口ノツラサ残スナ 盛
涙ヲモ午向ニナサハウケヤセン
無カアトフ^{ホノミ} 苔ノシタミチ 林
ヤミフカリ住シハ夢ノ庵朽テ 翁
都ノ月ニタレカヘルラン 祇
シラヌ野ニヒトリ露ケキ草枕 林

カタシク袖ハタ、アキノ風 盛
タニサカニ童子シ里ノ衣経ヌ 祇
ハニユフホトモ我ナ隔テソ 盛
玉章ノカヘシハカリヲ契ニテ 祇
イツラニユトノアフセナラマシ 翁
夢ナクハ古郷人ヲ頼メノヤ 盛
ミクラヲカセテ浅茅生ノカケ 林
カヘルナト花散ヤラテ霞野ニ 祇
春ノ日數ヨオモフカヒアレ 盛
年ユヘニ餘波猶ウキ表衣 祇

キノフニナサヌ別レ路モカサ
イツノニ遠クモ人ノカイルラン
子ソツキルニ生レオトレル
イヤシキモ大君ノ世ヲ始ニテ
學ベアサカノ大和言ノ葉
花カツミカレト心ノ色ハナシ
月ニ小舟ノカヘルユフカハ
山モトニ千鳥鳴江ノ霧晴テ
秋ノムシニハ風ノサヘヌル
更ルマ、礎ノ音ノ近キ夜ニ
翁 盛 翁 林 祇 翁 祇 林 翁

余所ノ思ヒモキクカラソウキ
鳥部野ノ煙ニ人ノ名ヲトヒテ
キヘナニコトヲナケク身ノ上
ノソミアル道ニ心ヤ残ラニシ
傳ヘン法ノ數ナオシミソ
松島ハ舟サス海エラシルヘニテ
ナミニ管屋ノヤトリヲソカル
月モミヨカ、ル藻塩ノ小夜枕
コロモニフカキアカツキノ露
帰ルサノ身モヒヤシクニ風吹テ
盛 翁 祇 盛 林 祇 林 盛 翁

ワスレヌオモヒ心ニシム
 面影ニナリテヤ花モウカルラン
 木未カスメルイニシヘノアト
 人モナキ垣根ニ鳥ノ囀テ
 夕日カスカニノコル道ノヘ
 入山ヲサソヒテ鐘ヤ響ラン
 御夕ケハルケキミヨシ野ノ奥
 出ヌヘキ佛ニモ身ハヨモアハシ
 夕ノニハ心フカクアワレメ
 別レテハ誰サキタシ今日ノ友
 祇 林 盛 祇 翁 林 盛 翁 林 祇

契リハカナヤ道ニハノ露翁

宗祇廿 尹盛廿二 牧林廿二 穆翁廿四

阿二

鵝峯文集ニ

良雲少年有試毫之作旧臘椿府梅雲文應
 人之招自江城赴羽州故其詩中及此葵亭
 林子見而奇之繼聲以贈之云爾

暉日和風幾度迎父遊奥羽子江城関雞待旦白河
 畔遐想行人記月正

神社

一續日本紀

仁明帝兼和三年春三月乙丑詔奉充陸奥白河郡從

五位下勳十等八溝黃金神封戶二烟以應國司之

禱令採砂金其數倍常能助遣唐使之資按此時ノ

後原當嗣小野篁ナリ兼和八年三月癸巳奉授陸

奥勳十等都々古和氣神從五位下ナルコソ白

河ノ郡ノ神ノ古ニ見ヘシ始ナリ黄金ノ事產物

一類聚國史存衡二年二月陸奥永倉神列於宮社

按此社ヲ白川ノ神ト知セリ兼和齊衡ノ後

二撰ハレタル延喜式ニ白河ノ外ハ他郡ニ此
神名有ルヲ無ケル也

一延喜式神名帳白河郡七座

都々古和氣神社名神太 伊波止和氣神社

白河神社 八溝嶺神社 飯豊比賣神社

永倉神社 石都々古和氣神社

又同書名神祭二百八十五座ノ内ニ奥州ニ都々

古和氣神社一座アリ

白河神靈驗揭 按都々古和氣 今南郷ノ八槻ト馬場トニ祠ル

然タルヲ往古リヤ 八槻ハ大善院別當馬場ハ面川大隅神主不動

鏡日本紀宝龜

八年十一月十二日

陸奥鎮守副將 院別當タリ大日本國一宮記曰都々古和氣ハ

軍後五位上百濟 王俊哲等言已大已貴男高彦根ヲ祭ルト見ヘ又神名帳頭書

等為賊被圍兵 疲矣盡而祈禱 七都々古和今ハ味耜記彦根トアリ大善院

生白河等神一縁起ノ畧曰日本武尊為東夷征伐下向シ玉ヒ

十一社乃得潰 八溝山ノ戰場ハ出現シ加勢ノ三神面足尊惶

園自非神力何存 根尊率勝國隊長狹命ナリケル日本武尊此ヲ

軍士請預幣社 勸請ナシ玉ヒ又地主ハ味耜高彦根ナリ後世

許之 回國雜記ニ道典 ヨリ日本武尊ヲモ添テ祭ル地名本ハ矢着ト

准后ノ歌ニ梓リ 矢ツキノ里ノ櫻 云寛治年中陸奥守源義家朝臣參籠ノ勝軍ノ

ソル春カトアハ 事祈請ノ八木ノ槻ノ木ヲ神庭ニ植テ奉リシ

言シヤ

ヨリ八槻トハ成ヌ叔又義家朝臣帰洛ノ後依
救命近津大明神ト踰シ奉ル寛延二年八月正
一位ノ勅許アリ祭式年々數度ニ及ブ神主
古ハ世々高野氏トシ高野ノ地故ニ高野ノ名衆ナリ高八郎長
廣ト云者ニ至テ今ノ別當廣良廿世人祖ニ階
堂在齋門大夫高盛法名ハ博良ニ讓ルト也下
ニ載タル文書ヲ以テ古社ナルヲ知ヘシ太閤
秀吉公小田原ヘ向ハセ玉ヒシ時モ大善院良
幹参向ノ施藥院秀吉公ノ出頭人ニ就テ有明ノ蠟燭
ヲ獻ス太閤ヨリ朱印書ヲ賜ハリ石田三成添

書アル故此邊大名白川石川ナント所領ヲ失
タレ氏神領ハ全クコソアリシ今モ御朱印ニ
百石ヲ有ツ御供鉢ノ銘ニ

敬白

奥州高野郡南郷八槻近津宮

奉造立 御鉢

大檀那 沙弥道久 結城滿朝

橘氏女 斑目氏カ

千代松

沙弥宗心

別當良賢

聖越律師長榮

大工沙弥阿弥

應永十八年大才十月十五日

又馬場ノ説ヲ畧聞シニ

崇神天皇御宇肥前松浦庄近ノ津ト云所ニ面
足命惶根命兩神ヲ奉祭故ニ近津明神ト云後
慶雲年中常州久慈郡保内領別卷ニ論ス此節
内ニ池田鏡山城主池田三郎富得ハ溝山ノ惡
鬼ヲ平ケシニ夢中ニ白羽矢ヲ授ケ我ハ近津

明神也ト告シ 帝聞召シ東奥ハ近津ノ社遷
サセラルト也是神主面川大隅正傳來ナリ又
不動院ノ説ハ大抵大善院ノ説ト類ハ是神德
ハ誠ニ千度戦トモ千度勝トテ天喜年中源賴
義朝臣當國在陣ノ時神德ヲ崇メ千勝大明神
ト稱ラル相ツキ玉ヒテ義家朝臣寛治年中神
前ニテ軍馬調練ニ玉ニヨリテ馬場ノ地名ハ
起リシ物此社本ハ北郷三森村馬場ヨリニ
山都ノ古和氣社ヲ大同年中伊野庄今ノ棚倉
ノ遷スト云按伊野庄古キ倉ニ笹原ノ庄伊野
村ト下リ笹原庄ト云ハ白川城中

逆原清水ト云名水モ下リ白川モ毎原ノ庄ナ
ル由言傳フ未タ考ル所ナシ伊野庄ハ高野ノ
部ニ載タル假名文昏イノカウト馬場ノ社
云地ニ載テ和名抄ノ入野ナルヘシト
三森ニ在シ時ノ神領ニヤ當今モ社御ト御名
ヲ呼フ和名抄屋代下云ハ文字ヲ糺サテ唱ニ
因テ載タルモ計リ難シ元和八年ニ至テ丹羽
長重朝臣常州古渡ヨリ此地ヲ賜リ遷テ社地
ヲ今ノ地方八丁計寄附ニ跡ヲ城地下ス馬場
ハ御朱印百五十石ヲ賜フ此社ノ文書モ得タ
ルハ下ニ載ス別ニ按ス馬場ヲハ近津上宮ト
稱スル事ナレハ昔奥州ノ内タリシ常州依上

ニ近津下宮アリ馬場ハ右ヘ對メ上下ノ宮ニ
テハ概ハ中央ナリシナラシ又此神奥州ノ一
宮タルト頭然タレ氏仙臺ノ塩竈明神ヲ一宮
ト仰クトハ恐ラクハ伊達家ヨリ御尋ニ因テ
東福門院へ奥州ノ名取ヲ申上ノ時封内ニ多
ク有ト告ラレタリト也野田ノ玉川今名城ニ
岡人不忘ノ山今白河一宮モ其類ニヤ然氏諸
ニ在ルノ類是ナリ
國ノ一宮ハ國府ノ程チカキ地ニ在リ多キ近
津ハ國端ニ有レ氏名神大ナレハ一宮ト崇メ
ルカ又ハ白河結城全盛ノ頃陸奥ニハ並ヘキ

無キ權柄有テ國府ニテ讓サレ時ニ一言トセ
ニニヤ

伊波止和氣

今亦在テ不知神名帳頭書ニ伊和

古和介ハ手力雄命トアリ萬多王姓氏録ニ河

内國神別ノ内ニ多迷連ノ下ノ注ニ神魂命見

天石都倭居命之後也トアリ上古ニ手力雄命

ニ無之メ別ニ此人有テ白河ニテ何ヤラニ故

アツテ祭レルカ計リ難シ

白河

今白河城東鹿島ト言傳フ吉田家ニテハ

根田村鳥子明神ヲ白河神社ニ定メ置ルトナ

鶴峯集

源吏部大御君治

白河城改命之暇祿冷

以遺懷者多矣甲申

季秋賜書之次被示

倭歌咏嘆之余因其題

摘其尾字綴唐絕以

獻之

阿武隈河邊鹿嶋社

地稱邊隈在奥州健雷

灵武一宮也神凡把斷

赤衛塞河水千古依

然流

此詩ヨリ赤衛征伐ノ

ヨリ鹿島ヲ年々祭

ルトハ鶴峯ノ博物

必考ヘアルニ

ニ何ノ證有テ不詳白河神社ヲ鹿島ト改メ祠

リシハ常陸國ハ境ヲ接シ鹿島ハ東方ノ大社

ニメ威徳モ異レハ衆人渴仰ノアリ後ニ移

シ祭タルナラニ此類白河ノ鹿島ノミナラス

同郡飯土用村ノ鹿島ハ式内飯豊比賣神社ト

リ岩瀬郡梓衝村ノ鹿島モ梓衝神社ナリ白河

神社ト一般ノ事ナラニ其證ヲ揚シニ三代実

録貞觀八年延喜元年ヨリ三十奥州ニ在ル鹿

島社ヲ載テ云フニ正月廿日常陸國鹿島神宮

司言大神之苗裔神三十八社在陸奥國菊多郡

一盤城郡十一標葉郡二行方郡一字多郡七伊
具郡一亘理郡二宮城郡三黒川郡一色麻郡三
志多郡一小田郡四牡鹿郡一ト盡ノ郡々ヲ舉
テ記スト雖モ白河岩瀨ヲ言サレハ白河飯土
用梓衝共ニ古ハ鹿島ニ非メ神名帳ニ載タル
儘ノ神ナルヘシ土人ハ源順カ歌ツラクトモ
忘ス戀ニカシニナル逢隈川ノアヲ瀨アリヤ
ト是ヲ澄トスレ氏亘理郡ノ鹿島ニテモ此歌
ヲ引ト也然ラハ白河ノ證ト云難カテニ別當
寂勝寺觀音ハ仙道人札所タリ三重塔ハ結城

親朝父宗廣ノ為ニ營セシト也

八溝嶺神社

始ニ天載セシ黄金神ナリ黄金ヲ

始メ世ニ出メ人ヲ惠メ神ナラニカ今ニ座ヲ
祭ル山王大己貴命ト日本事代主命トナリ此
山今ハ常陸下野陸奥三國界也絶頂社ノ東南
ハ常陸西南ハ下野社ノ後ヨリ北ハ陸奥也古
保内陸奥ニ隸セシ時ハ全ク奥州ノ内タルヘ
シ白鳳十一年役行者開基ニテ
仁明天皇敕願所前ニ出ス遣唐使ノナリ日光
權現ノ宮ハ水戸家ヨリ造營箱棟ニ葵ノ紋ヲ

ツク一人鳥居ハ下野黒羽鎮幸大関家建テル
山王ノ祠ハ棚倉ノ領主代々建立太田家ニテ
箱棟ニ桔梗紋ヲ居テ脩造有シニ小笠原家ニ
至リテ山下ノ村落御代官邸トナリ建立ノ縁
故無レハ此モ水戸家ノ建立トハナリ又奥院
觀音仙道ノ札所ナリ別當上ノ坊光藏院ト云
フ

飯豊比賣神社 白河城北ニ里飯土用村ノ鹿島

是ナリト言傳フ別ニ考所ナシ

永倉神社 白河城乾ノ方長坂村熊野相殿ニ祭

竹貫御仙石村雀
宮アリ社人飯豊比
賣神社ト云越後柏
崎雀森ノ院ニ鶴森
ナリト然ラハ古ノ國
ノ鎮ニ下リシ人ヲ祠

リシモノカ

ル長坂村元ハ長倉村ト云ヒシト土人言傳フ
石都 古和氣 今石川郡浪釜村八幡也神主取

傳ニ寛喜三年領主石川肥前守光衡命セシト
テ撰ヒシ縁起アリ内大臣鑑足公常陸ヨリ奥
州へ越テ草中ニ一ノ筒アルヲ見ルニ自之破
テ中ニ魂子アリ虚空ニ光ヲ發ノ我是鬼神ナ
リト云フ神姓ヲ問フニ高彦ト答フ味耜高彦
根ナルヘシ山ヲ筒子山ト云鑑足公ノ名ニヨ
リテ村里ヲ筒鑑ト云フトナリ縁起文長ノ疑
ヘキ事モ多シ別ニ一考アリ試ニ此ニ録ス此

今石川郡ノオヤ村
泉ノ近所敷里ノ間
ハ石皆奇ニノ光明
ナルアリ木理ノ如ク
ナルアリ凡石アル
ナシ又石英ヲモ多
ク出セリ

祠ヲ中央ト見テ前ニ石前郡アリイハサキ或ハ中古ヨ
ルモノアリ同訓テ用井タル後ニ石背郡イハセ今岩
作ルアリ又岩城郡ハ石ノワキトノ事タルヘシ
疑テクハ此神鎮座ノ頃ハ此地ハ石ナシト言
タル云ニテ近郡ヲモ総ヘ掌リタル地ナルニ
因テ近郡ノ名モ是ニ本ツキ起リシナラン今
ニ石川トテ石ノ縁ハ遺リシナランカ古證ノ
タラサル下コソ口惜ケレ又同村大安寺文書
ニ炭釜ニ作ル塩竈明神ノ類ニテ此神ノ始メ
テ炭作ル下ラ人ニ教ヘ玉ヒシヨリノ名ニヤ

文書出シ證トス

陸奥國炭釜於一方同素者給々兮
被預必次吾村ニ更當知ノ不有相遠
ニ成石源渡依必件

永和三年十月九日

沙弥判

石川お菰入乃版

是ハ安藝入道下高三郎大郎トテニ階堂須賀川ノ別族ト土地争ヒノ時ノ文書ナリトシ

一 関ノ明神

何ノ世何ノ故ニ勸請アリシニヤ今六

祠アリ旗宿村ノ古道ニ一ツ今ノ官道白坂明神
村ニ一此所場ヲ越下野常陸ノ境大洪村界ヲ越
テ一依上ノ内ニ二依上ハ白川ノ内ナリ東鑑ニ文治下

五年頼朝卿奥州征伐時白河ノ関越へ玉と関ノ
明神ニ御奉幣アルト云ハ旗宿ノ明神ナリ此祠
ノ箱棟ニ今ニ伊達氏ノ紋付タルハ改宗朝臣白
河迄旗下ニ附ラレシ時ノ造營ナルヘシ

一 **古殿宮** 竹貫卿十三村ノ鎮守ナリ年ニ順次ニ二
三村ヲ組合テ祭式ヲ行フ社ニ夜菴ノ流鏑馬
ヲ行フ康平二年ノ勸請ト云フ

一 **宇賀社** 棚倉城下ノ鎮守ナリ赤館ノ東南山ニ倚
テ宮居ス 永禄年中鹿子三河守赤館ニ居シ屋敷
地ニ宮居加ハリニ故ニ今鹿子山ト号
ナスリト

一 **天満宮** 川上村ニアリ社内棟札ノ如キ板ニ

天満宮

永禄六己巳年東北野ノ移

施主

お乳古の 孫四郎

永老費文

昇附 田代十郎

日

日

信長惣兵衛

領主後系頼臣右兵衛 結城家志ハシ

一 **橋次社** 皮籠村ニアリ村名本ハ吉野宿ト云ヒシ

義安年中出羽宝澤ノ橋信高兄弟沙金交易ノ故
郷ノ歸ルサヲ藤澤某ナル盜賊此ア夕リニテ害ス

三行李ヲ披キ取リシ事ヨリ皮籠ノ名ハ起リシ
金子橋^{ゴカ子}金^{キン}分^{ブン}田^{テン}等ノ小名モアリ後ニ義経朝臣橋
次兄弟ヲ八幡ノ相殿ニ祭リ社ヲ此ニ建ラレ橋
次ニ嘗テ長途ヲ伴ナワレシ恩ヲ謝セラレシト
也信高ノ墓トテ碑三基アリ石皆剥落ノ全キ者
ナシ文字有ニ似テ分ナ難シ下総國大湊賀ノ邊
ニテモ橋次ノ事此亦ト同シ如ク語ル者アリシ
ト聞シ何レノ地実説ニヤ

鎌倉山竹貫
村ニテノ説此ト

一 御靈社 三城目村ニアリ鎌倉権五郎景政白川石

川ノ内領知賜ハリ住セシトテ竹貫郷ニモ鎌倉

遠ナリ山川
ノ部ニ出ス

山ト云モアリ其由緒ニテ祭ルト也恨ラクハ所
傳ヲ失ス寶物古キ軍配團扇并軍扇別當景政寺
ニ古文書アリ^{下ニ}出ス此村ニテ蘆毛馬ヲ畜ハス矢
柄竹ト唱ル竹ヲ植ス崇ヲ恐ルト古来ヨリ傳言
フ氏人恐レテ犯ス者ナシ我 定信公寛政年中
吉田家へ請テ免許ヲ得テ其指ヲ社へ告ケ人ノ
惑ヲ解テ馬ヲ蓄ヒ竹ヲ植テ民用ニ給スルニ崇
有ルトナシ

八槻大善院文書

寄進

花押

人

右結河ノ八節町内一箇道津大明神
永年奉進ノ所也但於此井闕而地出
之を代以若也仍奉進ノ状如件

應永十二年癸酉二月廿二日

町
頭朝花押

奉 寄進

道津大明神一八概

石井御内大内村内 年貢淺

合又母貫文 毎年之を定額以給

右依所願成就其果之儀主望若奉進之年

第民快樂奉進令長遠仍寄進ノ状如件

應永廿四年九月廿日

沙弥道久

滿乾法号

奉寄進

道津社頭

成田内

田收七斗扇 刑ア給内

分限二貫八百文

右為送受形奉寄進ノ状如件

應永廿七年十一月廿日

氏朝
阿

寄進

近津文

依上保内山田村

西を、きん

分陵七貫文

右寄進状如件

永享二年正月十日 氏朝花押

皮山事近津大御神ノ以領ノノ
是是此儀お向後可為清斗以何者後日

状如件

永享十年二月四日

氏朝花押

八槻近津別當

下野國茂武大山田村カノノ在宗

分陵二貫文

右前在八槻近津大明神寄進ノノ也
状如件

永享十年二月十日

直朝



皮山之事 迫津大御神領之事
是之北候亦向後之方涉斗以仍為後日狀
如件

文安元年八月廿五日御理大夫直朝花押

八槻迫津別當

奥州菊田庄内小山田之良天神別當再

清礼堂別當

右付前幼以者可奉寄附以考為幼狀

文安三年七月十二日 直朝花押

八槻迫津別當

八槻迫津 文幣殿奉加帳

奉加馬一疋

直朝 花押

奉加馬一疋

直親

奉加馬一疋

千代松丸

奉加馬一疋

直常

奉加馬一疋

宗朝

奉加馬一疋

直康

鳥 龜 田

奉加馬一疋

朝祐

馬

奉加馬一疋

直政

馬

奉加馬一疋

親朝

馬

奉加馬一疋

前長門守直宗

馬

奉寄進迫津大明神所

奥州岩城郡内上田所領一所寄進

申處実也

仍為後日寄進状の件

岩城周防守清隆花押

康正三年丁七月廿九日

迫津宮へ寄進する野内山王山之事

任先例に有涉知れに仍る寄進を状の件

寛正三年 癸未七月十一日 前安藤云々直政花押

進上八椽別當

友桑の田永代

内迫津の石の分りしれに目録を度かそ後

之心は、仍方後日状如件

以應五年い、辰國二月十七日改朝

看

近津別當、系

法、田、斗、為、と、口、斗、之、殊、き、地、か、永、代、と
亦、費、文、う、り、了、し、い、け、之、七、殊、き、地
永、代、并、進、了、い、の、考、後、日、如、件

東條親前入道為安
同 右京進 基宗 為

侍城、臣ナリ南郷
東条ト云地アリ

う時明應又年 丙辰七月一日

南郷之日

田中うちの子家

御近津官に永代考進申候て有、以、意、好、ん
仍方後日状如執達件

明應六年二月十二日

改朝為押

近津別當、系

近津、し、湯、信、田、志、不、井、入、内、の、子、家、い、意

み分のむねなるの事意は下し様
いふ分心持しき外の事と云ふの
こと——のの後一筆を執達
如件

明應九年己卯三月十一日 改朝花押

近津お苗八系

武蔵守内河内守年貢 寺貫文

近津の事進申にて有由素坊の元継名
小糸伊勢の方よりて仕上り後日一筆

をりし執達如件

改朝花押


明應九年 庚子月朔日

近津別当八系

至近年貢を貫め名又し不十一貫文
永代賣りし申し回費文に分かる
を律にを中以為後日一筆也を

限目有書(大文)

文應二年三月十七日

朝基 

八槻別當

八槻十日市場の畠一間畑目より
永代買地之事 意得い仍執達也件

文龜二年いぬのく三月廿日

改朝 為押

八槻別當

右近津大形神八槻の寄進之事
常洲小里村内より 此より不在也

一間令寄進不也件

文龜二年 癸卯月十二日

修理方丈朝持



い槻別當

結城庶流ニテ修理大夫ニ世ニ任
ス其人十九ニ

右寄を

石川右衛門

質倉宮の神田二斗附け内沖より田二斗附

畠二斗は安山より年貢二貫文より寄を

仕込成初より清形橋より執達也件

改朝花押

于州永正三年乙丑三月十二日

近津別當 涉日富中

奉寄進

近津大明神

山菅生湯川左家并石井御坊内 毎年二進下

仍為後日状如件

永正七年 癸丑 七月吉日 改朝花押

近津別當系

いなきこのは神也む祓ふりし事
七年心付アリ 人をもおせらぬ
為後日一筆を

改朝花押

永正七年 乙丑 三月十日

いなき別當

いなき十八巻一筋のあゝお付し
能き少くたのいなき為後日
一筆の件

永正十八年土月日

隆朝

[Signature]

やほき別當に

系

こまいー内了るめんはくちり田
二斗より地忍いあせ

大明神ノキー一ノ中ノ為日休

あいにんいほー九月吉日

和志新花

為頼
[Signature]

ちくろ別當に

系

區々仁貴文三年の月を津にお付しんる井つ
ちくろ河原邊より日清御本とつと知しん如
就四物戸情刷はくは曾波投露枝あふふ苗多
二貫又いつ一の年より多の年まう二年お付
はししいぬの年ハぬ前々後街のり波知はに
為ら後一筆をきりしと清

大永三年ひつしの日三月十二日

和知 常頼 印

八槻別当 口宿不

東主あとのち田中平尉

い槻を律へし奇をく之例よきと知り
有くいおらぬ一色も好まじき哉

享禄二年 晚 正月吉日

義綱



八槻別当

東主あとのち田中平尉の義綱

此後高きを先例にせしむるは
戸近公の清和天皇の御代に
一色も好まじき哉

享禄二年 正月吉日

和知園防

常頼を押

八槻別当 口宿不

此のちの秘へし一色も好まじき哉
戸近公の清和天皇の御代に

後一筆をくし定ぬる状の件

大田和氏於大浦

常彦

印

涉を津別考の

天文四年己未二月吉日

迫津大明神へおつ来のを今考を
か後日一筆の件

天文四年己未二月吉日 茂綱 蓋押

八槻列當

迫津大明神へおつ来のを
一間の書より和涉考をくし
の件

天文四年己未二月吉日

和知

亞頼

原

八槻列當

涉回中

五世断涉初念突入考

御迫津宮に山本を内平之祈考進
申は他人の好不和有涉不勢作の件

天文四年己未二月十八日

侍習

吉良丞押

八槻別當

御田舎

就 近津造榮次及伴玄少右衛門尉
酉年近五年典馬二持金以自成年の世々
下りての後日一十年世々

天文元年己十月日

晴綱

印

八槻別當

右管領より侍の輩水代又連より
湯津領を寄付をせお目録及熱室戸
目録別帳は任侍熱室湯田にお水代
は分て方後より為以後押書如件

天文十七年(持前の)暮月十日

菅生高尉

御卷 印

八槻別當

御田舎

すかしの湯より一年に一度は湯の車より
かましとあそ水代は津アかましとあそ

是れ等目録に於ては、
子ありては、
一書あり件一

班月下被さ

天文七年十月廿二日

常陸 田

八槻列考 田

就邊津山送笑如前々賣業し役事し
候親御申一年高し高し家風志免
角ありては自ら成敗方おほし

如件

天文廿二年九月日

晴総



八槻列考

邊津官山本木君の内小次知物在事厨次
よりより初永代波奇をより後日一筆ゆ定
如件

天文廿二年九月日

晴綱 印

八槻列考

近津御遠美并ふあし何方も村木
うは力多しゆふた列系は着又免角尸
仁者下及披あり堅下しけり力少治用
一筆し

永祿三年 癸酉月 晴 綱

印

八槻川

南郷中意しし者停考し中鶴山平立部
思し地月し、ア、カ、シ、ケ、内、波、又、地、波、形、を、
杉、以、甲、入、金、裏、し、流、形、を、六、角、形、要、し

為後日一筆考し是

永祿九年丙六月吉日

印

八槻川

其名盛氏止に齋ノ花押カ
其ノ字ニ似タリ止に齋ニハ
反ノ如シ氏ノ字ナリ

近津御神候し候かあし列系
ふたふたのり

天正元年

十月廿六日

我廣

教

八概列當

以前未可也以此種成就於遠方之勢地念
之月大竹之志意為兩概大之月一乃大村之
一石村也其下之概以形勢之形念任念大之
肉之中之是也其後流波之字之月後日等
之之何也件

天正七年己卯

二月廿日

石院

定

八概列當

寺村之志意之物由後寺所分

邊津之形意進上之概以形念任念之

向後潮前也其下之志意進上之概以形念任念之

一等下何也件

天正七年己卯二月廿日 石院 兼押

八概列當

此度存立を目前及お計を

近津大町地所と云々の内わきと云々の年

之田少の内甲の邊に在る邊に程以袖

法藏寺有縁祈りむと云後且一筆を云

お指押し河東田上縁寺管生を為也云

渡り系奉治等、何如件

天正七年己丑

拾月吉日

不税 花押

大膳院

近津官神人本任先例之趣別者不堪以
於遠犯之輩去て有矣沙法也何状如件

應永七年九月十日

花押 満朝

近津別當

付近津師坊

契書

右近津の涉神事の時と云々

ありて人等共くしるる一人

と云々はありてしるる一人

近津宮神人未任先例之禮別當而堪公
於遷都之事志之有異沙法仍状如件

永正四年丁卯六月廿六日 改朝花押

近津別當

近津宮神人未任先例之禮別當而堪公
於遷都之事志之有異沙法仍状如件

吉永四年七月廿三日 義綱 花押

八槻別當

近津宮神人未任先例之禮別當而堪公
義綱一書志之有異沙法仍状如件
於遷都之事志之有異沙法仍状如件

吉永四年七月廿三日 和知園防 常秋花押

八槻別當

近津宮神人未任先例之禮別當而堪公
於遷都之事志之有異沙法仍状如件

天文五年癸卯九月

義綱 花押

弘治四年戊午二月

五

馬場別當

表書

馬場別當

晴綱

又同文言同年月ニテ花押並如此表書馬場別當
當隆綱トアリ誰人ニヤ
立花宗茂棚倉ヲ領セラレタル時ノ文書不動院
ノ藏ニ

以上

當殿ノ内ニ馬場近邊大明神所

領百六十石分先代友書出ノ通
清朱平有取戴度申方以之依
川酒井雅系以取之依之也
日光所文移又六月

清朱平有取戴度申方以之依

川酒井雅系以取之依之也

日光所文移又六月

清朱平有取戴度申方以之依

川酒井雅系以取之依之也

日光所文移又六月

多々ふけしとお改し何
時しけりてと信知りて
道しけり移りて改し何
改し何と改し何と改し何
改し何と改し何と改し何

多花右近将監

元和三年

三月廿一日

三

三場列

寛永二年五月七日遷宮棟札

本願丹羽宰相長重公

高松加之出村良萬

宮総奉行家老

大谷左馬之助秀成

柱考本々寄色

丹羽伊豆守 正次

普請奉行

下野五住人

中新井右馬之助

黄瀬五住人

豊田弥五右衛門

禁制

三場支山

一諸木伐立為之奉
一牛馬放飼之事
一放火并無利之人出入之事
右當山之津大明神植之形
地之從長壽公之志之自
杉分因入於方之曲之奉
の如件

寛永二年正月三日大谷馬場

秀成判

丹羽伴重守

正次判

白河ノ神社ノ鐘銘

奥州白川庄竹原郷

鹿王山取勝寺鹿島宮奉造

鑄願主清眼大徳

藤原朝臣左衛門佐義綱

藤原左京大夫晴綱

新小笠雅樂頭篤綱

橘朝臣斑目十郎廣基

源朝臣和知左馬助直頼

奉行

大檀那

米村早山但馬守清次

于時天文十三年丙辰閏十一月十一日

又彌勒堂ノ内ニ大盤若古寫本アリ經箱ノ上ニ

奉^{欠一字}大盤若經金部奥洲白川鹿島大明神ウラ

ノ方ニ于時天文五年芳賀^{此間}文朝臣トアリ

須釜八幡ニ文書アリ共疑フ所アリハ出サス

ユノニ行トモイトハレヤセニ
身ヲカクス人モヤトリハ

翁